

## シンプル生理学 改訂第8版 第1刷 正誤表

下記の箇所に誤りがありました。謹んでお詫びし訂正いたします。

頁	行, 箇所	訂正前	訂正後
p26	「表 2-1 末梢神経線維の分類」		別紙①に差し替え
p36	「表 3-1 感覚の種類」 「深部感覚」の行	ゴルジ腱紡錘	ゴルジ腱器官
p38	「表 4-1 筋肉の分類とその特徴」 「筋の構造」の行		「横紋」の模式図と「横紋, 合胞体」の模式図を入れ替える
	「表 4-1 筋肉の分類とその特徴」 脚注として追加		各筋肉の特徴については, p56, 図 4-27 と して図示した.
p55	本文 下から 4 行目と 5 行目	徐派	徐波
p56	本文 上から 10 行目	伸展刺激によりか開口し,	伸展刺激により開口し,
	本文 上から 15 行目に追加		流入した $Ca^{2+}$ が小胞体のリアノジン受容体を介して $Ca^{2+}$ 放出する機序もある.
	「図 4-27 骨格筋, 心筋および平滑筋における活動電位と収縮張力の関係」		別紙②に差し替え
p59	本文 上から 3 行目	脊椎管	脊柱管 (脊椎管)
p60	本文 下から 2 行目	これを筋節 (サルコメア) という	これを筋節 (ミオトーム) という
	本文 下から 11 行目の見出し	3. 皮膚節と筋節	3. 皮膚分節と筋分節

p62	「表 5-1 脳神経とその機能」 「Ⅶ」 「顔面神経」 「内臓求心性線維」 の 行, 「機能」 の列	舌の前 2/3 の味覚	舌の前 2/3 の味覚, <u>軟口蓋の味覚</u>
p80	「図 6-25」 「半規管膨大部稜 (A.)」 の図中 文字	ゼラチン様物質 (耳石膜)	ゼラチン様物質 ( <u>クプラ</u> )
p84	本文 上から 13~14 行目	新しい研究では苦みは舌根部よりも舌尖部 で閾値が低いことがわかった. うま味につ いてはいまだ不明である.	<u>2000 年以降の研究により舌全体の味蕾が 5 種の味覚受容器を持つ味細胞を持っている ことが明らかにされた.</u>
	本文 下から 1~2 行目	新皮質中心後回基底部の顔面からの皮膚感 覚感受部位に至る (図 6-33) .	<u>新皮質中心後回の体性感覚野の下部に接し た部位にある一次味覚野 (ブロードマンの 43 野, 図 9-14 参照) に至る.</u>
	「図 6-33 味覚の伝導路」 の図中文字	大脳皮質 半月神経節	大脳皮質 <u>一次味覚野</u> 下神経節
p86	本文 上から 14~15 行目	A $\delta$ 線維である.	A $\delta$ 線維と無髄の C 線維である (図 6-36, <u>表 2-1 参照</u> ).
p88	図 6-38 「延髄」 の部分	楔状束核	<u>薄束核</u>
		薄束核	<u>楔状束核</u>
p94	本文 下から 5 行目	皮膚節	皮膚 <u>分節</u>
	本文 下から 5~6 行目	皮膚節の規則	皮膚 <u>分節</u> の規則
p97	表 7-2 $\alpha_2$ 受容体の特徴	Gi, cAMP $\uparrow$	Gi, cAMP <u><math>\downarrow</math></u>
p106	本文 下から 2 行目	Ⅱ, Ⅲ, Ⅳ群以下の細い線維で	<u>Ⅱ, Ⅲ, Ⅳ群の細い線維で</u>
p108	本文 上から 3 行目	(図 8-6 参照) .	(図 8- <u>5</u> 参照) .
	「図 8-7 バビンスキー反射」 B. のタイトル	B. 錐体外路障害	B. 錐体 <u>路</u> 障害

p111	本文 上から 3 行目に一文を追加		両側前庭迷路機能障害者では、床面が傾いても前庭迷路反射が起こらないので、身体の平衡と頭位の回復ができず、転倒してしまう (図 8-13b) .
p115	本文 上から 8 行目と 11 行目の冒頭	線状体	線條体
p133	本文 上から 9 行目	穿通枝を <u>通</u> って	<u>貫</u> 通枝を <u>通</u> って
	本文 上から 12 行目	この機序に 1 章で述べた LTD 現象が	この機序に <u>2</u> 章で述べた LTP 現象が
	「図 9-20 海馬の模式図」	穿通枝	<u>貫</u> 通枝
p151	「図 10-16 視床下部ホルモンの構造と産生細胞の存在部位」 脚注	ペプチドは、左端が N 末端、右端が C 末端を表す。	<u>この図ではペプチド配列は左端の C 末端から右端の N 末端に向かって示されている。</u>
p219	本文 下から 9~10 行目	下腹神経と陰部神経は内・外肛門括約筋を収縮させ、骨盤神経は内肛門括約筋を弛緩させる。	下腹神経と陰部神経の <u>興奮</u> は内・外肛門括約筋を収縮させ、骨盤神経の <u>興奮</u> は内肛門括約筋を弛緩させる。
p268	本文 上から 16 行目	血管の直径の 4 乗	血管の <u>半径</u> の 4 乗
p287	本文 下から 3, 4, 6 行目	機能的残基量	機能的残 <u>気</u> 量
	「図 16-9 肺と胸壁の圧-容量関係」の図 中文字と解説文	機能的残基量	機能的残 <u>気</u> 量
p293	「図 16-14C ヘモグロビンの酸素解離曲線に対する血液の温度の影響」	10° , 20° , 38° , 43°	10°C, 20°C, 38°C, 43°C

(2023 年 1 月 株式会社南江堂)

表 2-1 末梢神経線維の分類

髄鞘	Erlanger/ Gasser の分類	直径 (μm)	伝導速度 (m/sec)	Lloyd/Hunt の 分類	主な機能	
有髄	A	α	12~21	70~120	骨格筋の運動神経線維	
					Ia	筋紡錘の一次 (らせん) 感覚神経線維
					Ib	ゴルジ腱器官の感覚神経線維
		β	6~12	40~70	II	皮膚の触圧覚の感覚神経線維 筋紡錘の二次 (散形) 感覚神経線維
	γ	4~8	15~40		筋紡錘の運動神経線維	
	δ	1~6	5~15	III	皮膚の温度覚・痛覚・触圧覚の感覚神経線維, 皮膚の自由神経終末からの感覚神経線維	
	B	1~3	3~14		自律神経節前線維	
無髄	C	0.2~1.0	0.2~2		自律神経節後線維	
				IV	皮膚の温度覚・痛覚の感覚神経線維	

(彼末一之ほか編：やさしい生理学, 第7版, 南江堂, 2017 を参考に作成)

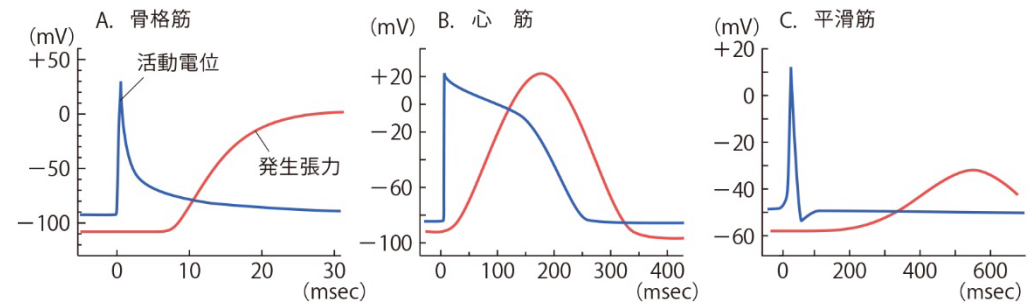


図 4-27 骨格筋, 心筋および平滑筋における活動電位と収縮張力の関係  
(A: A.L.Hodgkin と P.Horowicz, 1957 より, B: C.M.C.Brooks ら, 1955 より, C: J.M.Marshall, 1962 より)